

シェイクスピア能の作者

—— 上田邦義論 ——

An Essay on the Author of *Noh Hamlet*

川田 基生

KAWATA Motoo

Abstract: This is an essay on Dr. UEDA Munakata Kuniyoshi, the author of *Noh Hamlet*, by his leading pupil. The writer suspects that UEDA was most influenced by Dr. FUKUHARA Rintaro while young, and by NATSUME Soseki (who proposed Shakespearean plays to be translated into Japanese Noh plays as both are unique poetic drama). He also discusses UEDA's character as a poetry professor, enjoying its essence with prosody, and scholar-artist or actor-dramatist, rather than an academic student or researcher, which he argues is clear from the long list of his Noh performances attached to the end of this essay. Also the writer evaluates that UEDA enriches Japanese culture, combining Noh and Shakespeare in English and Japanese, and that UEDA in his essence is a forerunner of future human civilization in the direction of the peaceful world.

Keywords: UEDA Munakata Kuniyoshi, author of *Noh Hamlet*, Shakespearean Noh, FUKUHARA Rintaro, NATSUME Souseki

上田邦義 宗片邦義 シェイクスピア能 『能・ハムレット』 福原麟太郎 岡倉由三郎
夏目漱石

I

わが身の上をきかれて

福原麟太郎はその随筆「わが身の上をきかれて」において、みずからを語るに際し、福原の恩師、岡倉由三郎を語る形をとっている。

上田邦義は18歳で福原麟太郎に師事すべく山形より上京。

そこで、福原の随筆を座右に、福原的なもののなかで上田的なものを見てゆくことにしたい。それは古き良き時代の日本の英文学者の肖像であり、文学衰退の時代である今日に

あつてなお魅力を失わない上田邦義のある側面を語ることになるであろう。

福原は岡倉の学風を次のように語っている。

「先生自身は、一方では、古典的な、完成した、静かな、均齊的な秩序あるものをお好みになると同時に、他方ではロマン的な、実験的な、野性的な勇気を持ったものを愛されました。先生の一生の御仕事を見ても、一方では愛国的で保守的でいらっしゃったと同時に他方では、実にコスモポリタンで、革新的でした。学問の上でも、ひとから何十年も先んじて、新しいことを主張され、先生の学界での功績はそういう点にありました。」

この「均齊的な秩序あるものをお好みになると同時に、他方で実験的な、野性的な勇気を持ったものを愛されました」というのは上田邦義にもよくあてはまると思われる。

上田のシェイクスピア解釈は常に厳格で古典的であった。筆者は大学院のゼミの席上で田中重弘説などをもとに斬新な奇説への見解を求めたが、上田回答は常に中庸を得たものであった。

能楽についても、テープで聞く家元の謡よりも厳格な譜面どおりの謡いを徹底されていた。それは能楽への長い専心とそのことによる自負を伴っていた。

シェイクスピア詩の韻律は体内に内蔵されており、一韻でも誤れば峻厳な指摘があった。シェイクスピア詩にふれ、それが上田師の目にふれるときは、爆心地に行くような緊張があった。

世間的には上田門下はシェイクスピアも能楽も実験的野性的にやっていると思われているようであるが、そこは規定どおりの厳格なゼミ風景で、どこにも実験なぞなかった。

世阿弥六百年

福原随筆「世阿弥六百年」ⁱⁱⁱには

「わたしのおそろしく感心して見た能<花月>は、それを舞った故橋岡久太郎が「装束附終わりて鏡ノ間にて自が姿を見たるに前折烏帽子なき方がよからんと、フト思付き無しにて勤む」という工夫から生まれたことを、『観世』昭和三十八年十一月号中、故橋岡久太郎年譜で教えられたからである。その程度の工夫は橋岡さんくらいの大家には許されていたらしい。」とある。

上田邦義のシェイクスピア能は常に進化していた。稽古のときも変化があり、舞台も同じものはなかった。その時の気分、感興で移ってゆく。橋掛りに上田ハムレットが現れると、地謡の我々はシテの上田師を注視した。上田邦義には海の深さほどの準備はあるのだが、その日の聴衆の雰囲気の高揚に臨んで、その日の風に乗る。その時、その瞬間を地謡は凝視していた。

この空しき日々

「能楽界もたいそう動揺しているらしいが、私はただの観客なのだから、美しい能を見せてくれさえすれば満足である。美しくないものは、いくら何とか理屈があっても、結局は芸と称すべきものではない。」^{iv}

上田の英語能、はじめての人は誰も、理屈はともかく、苦痛なもの、との予想であろう。それが聴いてみて満足できる芸であることがわかる。そこには世阿弥が息づいている。

上田は一流としか共演しない。どこから来る発想か。芸についての福原の上記「この空しき日々」の認識と通底している。

日本の文芸を豊かにするための英文学研究

『福原麟太郎随筆全集 8 日記・書簡』付録の月報に福田恆存が「福原先生」という寄稿をしている。

「確か最初は『英語青年』の座談会で、先生の指名により亡き吉田健一君と私と三人で、イギリスの事やシェイクスピアのことを話し合った時だったと思ふ。その時、私は英文学の他のどの先輩よりも先生を身近に感じたのである。私は直ぐ思った、「この人は英国のために英文学を研究した人ではない、日本の文学を豊かにするために英文学を研究した人だ」と。英国や英国人のためなら、鯨立ちしても日本人は英国人の敵ではない、が、日本の文学を豊かにするために英文学を研究した人となれば、もはや「研究」といふ言葉はふさわしくない、英文学を味はつた人だと言ふべきである。」

上田教授は本屋で長時間立ち読みをして同時代を読む。一方長い歳月の購読愛読雑誌のひとつに『英語青年』がある。大学院のレポートのコメントに「これは『英語青年』に投稿するといいい」という上田コメントがあればしめたものである。

ゼミの席上の上田発言に上記の福原発想がある。「英文学研究について日本人は英国人の敵ではない」。上田のシェイクスピア能は世阿弥以来の能楽の自己展開の線上に位置する、日本の文芸を豊かにする芸能である。

高校時代の宗片（上田）青年は英語の弁論大会で高い評価を得た。スピーチの題は「何のための英語学習か」であった。“What Do We Study English for?” 審査員に田中菊雄、小川芳男。山形県は鶴岡市。数年先輩に丸谷才一、渡部昇一など。高3では東北代表。彼の生涯を貫くテーマであろう。

文明批評家

福原は「読書日記」大正4年1月21日に
「思えば自分は、この夏、おおいに発奮して、文明批評家になろうと決心したのであった。
——それは教育家の職分は全く文明批評家のそれと一致せねばならぬものである故に——
中略 もちろん吾人は、よきリーダーの教師でなくてはならないとともに、よき人格者でなくてはならないし、また同時に批評家でなくてはならない。しかし、所謂批評家は今の世の中では、文明のあとから走ってゆく後れまいとつとめる労働者にすぎない。吾人は今の所謂批評家を見て、深さのない、そしてやっと広い哲学者だと考える。思うに真正の文明批評家は、文明の予言者でなくてはならないし、また一方一芸に透徹せるアーティストでなくてはならぬ。自分は、そんな意味において、夏目漱石氏を崇拜する。同じ意味において岡倉先生の賛美者である。」

上田邦義は一芸に透徹したアーティストであるが、文明の予言者^vでもある。1973年以來、ソロー学会（アメリカ）の終身会員。

叡智の文学

「英文学の精華はその詩歌にあると言われると共にその随筆にある。随筆の特質は、英国民の生活の哲学の国語的表現である。彼等は何くれとなく書きつらねるうちに、おのれの人生観を述べる。随筆は知識を書き残すことでなく、意見を吐露することでなく、叡智を人情の乳に溶かしてしたたらせることである。争うためでなく、仲良くするためである。」

vi

上田邦義の文芸は叡智の文芸である。それは英文学が叡智の文学であることに由来する。上田は知識を書き残すことに熱心ではない。意見の吐露も日常的にはほとんどない。まるで真理は言葉で表現されるものではないと思っているかのごとくに。また人間は他人の意見によって左右されるものではないと思っているかのごとくに。叡智を謡のハーモニーの中に溶かすことに深くうちこんでいる。それは争うことでなく、人々を仲良くするためである。荒井良雄がつとに指摘している。1982年、初期の英語能『ハムレット』を磐田で観ての感想である。「どんなドラマの翻訳よりも、あるいはどんな論文や研究発表よりも、全人格的で、悟りの境地に達しておられるという意味で、私にとっては、刺戟的であり、具

体的であり、見ていて安らぎをおぼえた。すばらしいことだ！^{vii}」

II

清しと見ゆるもの ^{かはらげ}土器。 あたらしき ^{かなまり}鏡。 畳にさす ^{こも}薦。 水を物に入る ^{すきかげ}る透影。
『枕草子』 142

『枕草子』の内容を構成するのは随筆的章段、日記的章段、類聚的章段の3種である。以下、類聚的章段。

上演記録

K. の表示はここでの整理のための通し番号である。台本との対応関係を一義的とするため同一日の公演であっても演目が複数であれば別の番号をふっている。たとえば、1988年の全米公演では『能・ハムレット（仕舞）』『能・オセロー（全曲）』『能・マクベス（仕舞）』が同時に上演されたが、以下の表では別のK.番号を与えている。

特にことわりのないものは、作・演出・シテ、上田（宗片）邦義である。

K. 1	英語能・ハムレット	1982	静岡あなごや能舞台
K. 2	英語能・ハムレット	1982	磐田市醍醐荘能舞台 8月
K. 3	英語能・ハムレット	1982	磐田市醍醐荘能舞台 11月
K. 4	英語能・ハムレット	1983	イギリス グラスゴウ 講演と記録映画上映
K. 5	英語能・ハムレット	1983	イギリス ロンドン 講演と記録映画上映
K. 6	英語能・ハムレット	1983	イギリス ブリストル 講演と記録映画上映
K. 7	英語能・ハムレット	1983	イギリス ロンドン、サドラーズ・ウエルズ 劇場、講演
K. 8	英語能・ハムレット	1983	東京矢来能楽堂 2回公演
K. 9	英語能・ハムレット	1984	カナダ ブリティッシュコロンビア大学
K. 10	英語能・ハムレット	1984	静岡県国際理解協会
K. 11	英語能・ハムレット	1984	静岡日英協会

K. 12	英語能・ハムレット	1985	国立能楽堂 2回公演
K. 13	英語能・ハムレット	1985	ネブラスカ大学劇場 5夜
K. 14	英語能・オセロ	1986	静岡・青島ホール
K. 15	英語能・オセロ	1986	静岡県芸術祭（醍醐荘能舞台）
K. 16	英語能・オセロ	1987	国立能楽堂
K. 17	英語能・マクベス	1987	静岡県芸術祭（磐田市醍醐荘能舞台）
K. 18	英語能・ハムレット（仕舞）	1988	ウエズリアン大学（ジョージア州）
K. 19	英語能・ハムレット（仕舞）	1988	サウスキャロライナ大学
K. 20	英語能・ハムレット（仕舞）	1988	チャールストン劇場（サウスキャロライナ州）
K. 21	英語能・ハムレット（仕舞）	1988	ハーヴァード大学 ミュージック・ホール
K. 22	英語能・ハムレット（仕舞）	1988	東西融合劇場（コネチカット州）
K. 23	英語能・ハムレット（仕舞）	1988	ボストンの公共放送テレビ番組『セサミー・ストリート』（放映確認されず）
K. 24	英語能・ハムレット（仕舞）	1988	モンタナ大学
K. 25	英語能・ハムレット（仕舞）	1988	ブリガムヤング大学（ユタ州）
K. 26	英語能・ハムレット（仕舞）	1988	カ州立ノースリッジ大学
K. 27	英語能・ハムレット（仕舞）	1988	カ州立ポリテクニク大学
K. 28	英語能・オセロー	1988	ウエズリアン大学（ジョージア州）
K. 29	英語能・オセロー	1988	サウスキャロライナ大学
K. 30	英語能・オセロー	1988	チャールストン劇場（サウスキャロライナ州）
K. 31	英語能・オセロー	1988	ハーヴァード大学
K. 32	英語能・オセロー	1988	東西融合劇場（コネチカット州）
K. 33	英語能・オセロー	1988	ボストンの公共放送テレビ番組『セサミー・ストリート』（放映確認されず）
K. 34	英語能・オセロー	1988	モンタナ大学

K. 35	英語能・オセロー	1988	ブリガムヤング大学 (ユタ州)
K. 36	英語能・オセロー	1988	カ州立ノースリッジ大学
K. 37	英語能・オセロー	1988	カ州立ポリテクニーク大学
K. 38	英語能・マクベス (仕舞)	1988	ウエズリアン大学 (ジョージア州) 囃子付
K. 39	英語能・マクベス (仕舞)	1988	サウスキャロライナ大学 囃子付
K. 40	英語能・マクベス (仕舞)	1988	チャールストン劇場 (サウスキャロライナ州) 囃子付
K. 41	英語能・マクベス (仕舞)	1988	ハーヴァード大学 囃子付
K. 42	英語能・マクベス (仕舞)	1988	東西融合劇場 (コネチカット州) 囃子付
K. 43	英語能・マクベス (仕舞)	1988	ボストンの公共放送テレビ番組『セサミー・ストリート』 囃子付 (放映確認されず)
K. 44	英語能・マクベス (仕舞)	1988	モンタナ大学 囃子付
K. 45	英語能・マクベス (仕舞)	1988	ブリガムヤング大学 (ユタ州) 囃子付
K. 46	英語能・マクベス (仕舞)	1988	カ州立ノースリッジ大学 囃子付
K. 47	英語能・マクベス (仕舞)	1988	カ州立ポリテクニーク大学 囃子付
K. 48	英語能・オセロー	1989	常葉学園大学 (菊川)
K. 49	英語能・マクベス	1989	八幡神社 (静岡市)
K. 50	英語能・ハムレット (独演)	1990	グローブ・シアター (ロンドン) ミュージアム・シアター
K. 51	英語能・ハムレット (独演)	1990	スカンジナビア・ホテル特設能舞台 (コペンハーゲン)
K. 52	英語能・ハムレット (独演)	1990	コペンハーゲン大学劇場
K. 53	英語能・ハムレット (独演)	1990	ストックホルム人形劇場 (スウェーデン)
K. 54	英語能・ハムレット (独演)	1990	フォルジャー・シェイクスピア研究所 (ワシントン)
K. 55	英語能・ハムレット (独演)	1990	ミルブルック大学 (ニューヨーク州)

K. 56	英語能・ハムレット (独演)	1990	メイコン市私設舞台 (ジョージア州)
K. 57	英語能・ハムレット	1991	第5回シェイクスピア世界会議 (国立能楽堂)
K. 58	英語能・ハムレット	1992	あさば能舞台 (修善寺)
K. 59	英語能・ハムレット	1992	本間家能舞台 (佐渡) 世阿弥学会
K. 60	英語能・ハムレット	1992	醍醐荘能舞台 (尺八共演 中村明一)
K. 61	日本語能・オセロー	1992	宝生能楽堂 (東京) シテ 津村禮次郎
K. 62	英語能・リア王	1993	あなごや能舞台
K. 63	英語能・リア王	1993	醍醐荘能舞台 (シテ: アダム・ブロノフスキ)
K. 64	英語能・ハムレット (独演)	1994	ANZSA シェイクスピア学会 (オーストラリア・パース)
K. 65	英語能・ハムレット (独演)	1994	ジャパン・カルチュラル・センター (シドニー)
K. 66	英語能・ハムレット (独演)	1994	シドニー大学 (シドニー)
K. 67	英語能・ハムレット (独演)	1994	メルボルン大学
K. 68	英語能・ハムレット (独演)	1994	ヴィクトリア芸術大学 (メルボルン)
K. 69	英語能・ハムレット (独演)	1994	NIDA国立演劇大学 (シドニー)
K. 70	英語能・ハムレット (独演)	1994	アデレード大学 (オーストラリア)
K. 71	英語能・ハムレット (独演)	1994	プレイボックス劇場 (メルボルン)
K. 72	英語能・ハムレット (独演)	1994	モナッシュ大学 (オーストラリア)
K. 73	英語能・ハムレット (独演)	1994	ウーロンゴン大学 (オーストラリア)
K. 74	英語能・リア王	1994	ジャパン・カルチュラル・センター (シドニー) (シテ: アダム・ブロノフスキー)
K. 75	英語能・リア王	1994	モナッシュ大学 (オーストラリア) (シテ: アダム・ブロノフスキー)
K. 76	英語能・リア王	1994	プレイボックス劇場 (メルボルン) シテ: アダム・ブロノフスキー
K. 77	日本能・オセロー	1995	梅若能楽学院 (東京) シテ: 津村禮次郎
K. 78	日本語能・オセロー	1996	矢来能楽堂 (東京) シテ: 津村禮次郎

K. 79	日本語能・オセロー	1997	東京・宝生能楽堂 シテ：津村禮次郎
K. 80	英語能・ハムレット（独演）	1997	ニューヨーク市立大学大学院ブルックリン校
K. 81	日本語能・大僧正トマス・ベケット	1997	国立能楽堂 シテ：津村禮次郎
K. 82	日本語能・オセロー	1998	ロゼ・シアター（富士市）シテ：津村禮次郎
K. 83	日本語能・オセロー	1998	仙台市民会館（仙台市）シテ：津村禮次郎
K. 84	能・トマス・ベケット	1998	世界演劇連合年次大会（英国カンタベリー・ケント大学）シテ：津村禮次郎
K. 85	創作能：トマス・ベケットー能と声明と琵琶と中国古典打楽器によるー	1998	新国立劇場（東京）シテ：津村禮次郎
K. 86	英語能・ハムレット（独演）	1998	アジア演劇研究国際会議（ハノイ・ホーチミン劇場）
K. 87	英語能・ハムレット	2000	明星大学シェイクスピア・ホール（日野市）
K. 88	日本語創作能・クレオパトラ	2000	新国立劇場（東京）シテ：津村禮次郎
K. 89	日本語能・オセロー	2000	明星大学シェイクスピア・ホール（日野市）シテ：津村禮次郎
K. 90	日本語能・オセロー	2001	国立能楽堂 シテ：津村禮次郎
K. 91	日本語能・オセロー	2001	スターリング大学劇場（スコットランド）シテ：津村禮次郎
K. 92	英語能・ハムレット	2001	国際融合文化学会京都大会（関西セミナーハウス豊響殿能舞台）
K. 93	英語能舞・ハムレット	2002	全国大学国語国文学会夏季大会（明星大学シェイクスピア・ホール）
K. 94	英語能・ハムレット	2002	日本行動分析学会第20回大会
K. 95	英語能・ハムレット	2002	堺能楽会館
K. 96	英語能・ハムレット	2003	米沢市置賜文化センター能舞台

K. 97	英語能・ハムレット	2003	彦根市大師寺
K. 98	英語能・ハムレット	2003	大阪芸術大学大学院
K. 99	英語能・オセロー	2003	堺能楽会館 シテ：和田弦
K.100	英語能・ハムレット	2004	堺能楽会館
K.101	英語能・ハムレット	2004	鏡仙会能楽研修所能舞台
K.102	英語能・ハムレット	2004	熱海MOA美術館能楽堂
K.103	英語能・ハムレット	2004	日本大学軽井沢研修会館
K.104	日本語『創作能・ハムレット	2004	日本大学カザルスホール (出演：梅若研能会) シテ：津村禮次郎
K.105	英語能・ハムレット	2005	日本大学軽井沢研修会館
K.106	現代能・ふたりのノーラ	2005	梅若能楽学院会館 シテ：津村禮次郎
K.107	Double Nora	2005	Stockholm, SWEDEN SODRA TEATERN シテ：津村禮次郎 2夜
K.108	Double Nora	2005	Skein, NORWAY TEATER IBSEN シテ：津村禮次郎 2夜
K.109	Double Nora	2005	Bergen, NORWAY Scene USF pa Verftet シテ：津村禮次郎
K.110	Double Nora	2005	London, U.K. The Vanburgh Theatre, RADA シテ：津村禮次郎 2夜
K.111	英語能・ハムレット	2005	熱海MOA美術館能楽堂
K.112	英語能・ハムレット	2006	日本大学軽井沢研修会館
K.113	Double Nora	2006	ヘルシンキ・ツルン劇場 フィンランド シテ：津村禮次郎 2夜
K.114	Double Nora	2006	オスロ国立劇場 ノルウェイ シテ：津村禮次郎 2夜
K.115	Double Nora	2006	レイキャヴィック国立劇場 アイスランド シテ：津村禮次郎

K.116	宮古島讃歌	2006	沖縄県宮古島市 マティダ市民劇場 (作詞・節付・独謡)
K.117	英語能・ハムレット	2006	マティダ市民劇場 シテ：河本 望
K.118	英語能・ハムレット	2006	宮古島市池間島離島振興総合センター (短縮版)

主要参考文献

- (1) Ueda Munakata Kuniyoshi, "The Most Remarkable American : R.H.Blyth on H. D. Thoreau", *Otsuka Review*, No. 9, 1972.
- (2) Ueda Munakata Kuniyoshi, *Selected Scenes from Shakespeare* 『シェイクスピア名場面集』、The Hokuseido Press, 1979.
- (3) 上田 (宗片) 邦義 「世界の中の能」 『観世』、檜書店、昭和55年2月。
- (4) 上田 (宗片) 邦義 「能とシェイクスピア」 『英語教育』、大修館、昭和56年4月。
- (5) Ueda Munakata Kuniyoshi, "Some Notes on Noh Dancing", *Theater Research International*, Vol. VII No.1, Oxford University Press, 1982.
- (6) 上田 (宗片) 邦義 「英語能・ハムレットの試み」 『青淵』 414、竜門社、昭和58年5月。
- (7) 上田 (宗片) 邦義 「英語能ハムレット 生も死もはや問題ではない」 『学燈』、82-6 丸善、昭和58年6月。
- (8) Ueda Munakata Kuniyoshi, *HAMLET IN NOH STYLE*, 『英語能・ハムレット』 Kenkyusha LTD, 1991.
- (9) 上田 (宗片) 邦義 「なぜシェイクスピア劇は今まで能にならなかったのか——逍遙と漱石の芸能観に関連して——」 『芸能史研究』 123号、平成5年9月。
- (10) Ueda Munakata Kuniyoshi, *Essentially Oriental: R. H. Blyth Selection*, The Hokuseido Press, 1994.
- (11) 上田 (宗片) 邦義 「現代口語能」 第1回公演記録 『静岡大学人文論集』 47-1 平成8年7月
- (12) 上田 (宗片) 邦義 「『能・クレオパトラ』 : シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』 能劇化の研究」 『静岡大学人文論集』 47-2、平成9年1月。
- (13) 上田 (宗片) 邦義 *Noh Othello* 『日英二カ国語による「能・オセロー」 創作の研究』、勉誠社、平成10年。
- (14) Ueda Munakata Kuniyoshi, "Noh Hamlet", *Shakespeare: Readers, Audiences, Players*, Western Australia University Press, 1998.
- (15) Ueda Kuniyoshi, "Some Noh Adaptations of Shakespeare in English and Japanese", *Performing Shakespeare in Japan*, ed. Minami, Carruthers, and Gillies, Cambridge University Press, 2001.
- (16) Ueda Kuniyoshi, *Noh Adaptation of Shakespeare—Encounter and Union—*, The Hokuseido Press, 2001.
- (17) Ueda Kuniyoshi, "For Harmony and Combination of Cultures", *Nihon University GSSC Journal*, No. 1, Nihon University GSSC, 2001.
- (18) 上田邦義 「競争から共生・協調・調和へ」 『融合文化研究』 1号、平成14年9月。

- (19)上田邦義「能とシェイクスピア：世界の文化の調和と融合を求めて」『文学・語学』174号、全国大学国語国文学会、平成14年9月。
- (20)上田邦義「演劇の東と西——日本の伝統演劇とシェイクスピア」『文学・語学』174号、全国大学国語国文学会、平成14年9月。
- (21)上田邦義「能とシェイクスピアと行動分析」『融合文化研究』2号、平成15年5月。
- (22)上田邦義「日本語『能・ハムレット』初演台本（初稿）」『融合文化研究』4号、平成16年12月。
- (23)上田邦義「21世紀に生きるイプセシー『能・ノーラ』創作台本付一」『融合文化研究』7号、平成18年6月。

ⁱ福原麟太郎『文芸研究』昭和40年秋

ⁱⁱ福原はその年大学を退官、二人は直接の師弟関係にはない。

ⁱⁱⁱ福原麟太郎『観世』昭和39年1月

^{iv}福原麟太郎『文芸広場』昭和32年11月

^v上田は主催する融合文化学会のHPにおいて「前略・・・人類はその進化の過程において今やいわば世界文化の誕生を迫られているのではないだろうか。それはこの世界の中のいかなる文化が、他のいかなる文化やその一部と結合融和するものかかもしれず、あるいはかつて実現を見なかつた未曾有の思想であるかもしれない。この文化的進化は多面的な開花を見せるであろうが、その根底には「調和」の種子を宿している筈である。世界中の全ての人々に本会への入会をお勧めする。それは国境に見張りのいる閉鎖的な国ではなく、同じような考え方をする、何よりも平和を愛する人々の集まりである。・・・中略・・・自己中心の考えはもはや時代遅れの過去のものとしなければならない。もっとよく人間を理解しなければならない。もしもわれわれが、芸術・文化・医学・経済・政治を通してよりよい人間理解を得られるなら、それはこの目的達成への大きな推進力となる。世界の平和を願い、われわれのこうした活動に共感される方は、市民権や宗教や人種や信条の如何に関わらず、ぜひ本会に入会していただきたい。」と述べている。

^{vi}福原麟太郎「叡智の文学」『新潮』昭和15年1月

^{vii}荒井良雄「『能・ハムレット』を見て」『能・オセロー』創作の研究』1998年 勉誠社